

集団の理解— ナカニシヤ出版  
速水敏彦・吉田俊和・伊藤康児（編） 2001 生きる力  
をつける教育心理学 ナカニシヤ出版  
—分担執筆—  
中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・

立花政夫・箱田祐司（編集）1999 心理学事典（6  
項目） 有斐閣  
山岸俊男 2001 社会心理学キーワード（第7章） 有  
斐閣

## 研究状況報告 — 2000年10月～2001年10月 —

岡 田 猛

### (1) 研究業績

印刷中および発行済み（2000～2001）

編著

- ・植田一博・岡田猛編（2000）。「協同の知を探る：創造的コラボレーションの認知科学」共立出版
- ・K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) (in press). Designing for Science: Implication from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.

論文および著書（分担執筆）

- ・Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (in press). What makes collaborations across a distance succeed?: The case of the cognitive science community. In P. Hinds & S. Kiesler, Distributed work. Cambridge, MA: MIT Press.
- ・Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (in press). Cognitive science: Interdisciplinarity now and then. In S. J. Derry & M. A. Gernsbacher (Eds.), Problems and promises of interdisciplinary collaboration: Perspectives

- from cognitive science. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- ・Okada, T. & Shimokido, T. (2001). The role of hypothesis formation in a community of psychology. In K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) Designing for Science: Implication from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- ・岡田猛・高城早和子（2001）. 心理学の研究におけるドキュメンタリー的な情報の利用可能性 やまだようこ・サトウタツヤ・南博文（編） カタログ現場心理学：表現の冒険 金子書房
- ・Schunn, C.D., Crowley, K. 岡田猛（2000）. 認知科学：その学際性について 植田一博・岡田猛（編）協同の知を探る：創造的コラボレーションの認知科学 共立出版

### (2) 学会活動

編集委員

Psychologia Society “Psychologia : An international Journal of Psychology in the Orient”

## 研究状況報告 — 2000年10月～2001年10月 —

中 谷 素 之

最近1年間の研究経過を以下に示す。この1年は、さまざまな業務の中でようやく自分なりのペースをつかみかけてきた時期であったように思う。当然のことであるが、大学院時代に比べ時間的な制約が厳しいため、限られた時間でいかに効率的に研究や調査を行うかが重要であると考えている。動機づけを研究テーマとしている以

上、自分自身が“動機づけられている”ことが必要だと思うのだが、実際は怪しいものである。今後は“動機づけの維持と自己調整”が自身のテーマかもしれない。

### 1. 社会的責任目標に関する研究

教室という社会的文脈における学業達成過程に関する

研究が現在の中心的テーマである。社会的責任目標（社会的な規範や役割期待への遵守志向）は、児童の対人関係と学業達成の両面において積極的な効果をもつことが考えられる。児童の社会的コンピテンスが学業達成と相互作用する過程を明らかにしたいと考えている。

#### （1）学業達成過程

最近10年ほどのWentzelを中心とした社会的責任目標研究のレビューを研究科紀要にまとめた。内容的にはとてもではないが十分なものとは言いがたい。しかしこの領域の研究を概観してみること自体は多少の意義をもちうるかと考えている。

##### 社会的動機づけの発達と学業達成過程

—社会的責任目標研究に関するレビュー—  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）第48巻 印刷中 2001. 12.

またこの時期には、友人関係を媒介とした学業達成過程に関する研究を論文にまとめた。

児童の社会的責任目標と友人関係、学業達成の関連  
—友人関係を媒介とした動機づけプロセスの検討—  
性格心理学研究 印刷中

#### （2）協同学習活動

小集団やグループによる協同学習は、対人関係を基礎においた学習活動であり、そこでは児童の社会的責任目標が特に重要な意義をもつと考えられる。本年の日本社会心理学会において、協同学習活動に興味をもつ大学院後期課程2年生の出口拓彦とともに発表を行った。

社会的責任目標と協同学習に対する認知との関連  
日本社会心理学会第42回大会発表論文集 p. 596.  
2001. 10. (出口拓彦と共著)

#### （3）社会的責任目標の促進

教育実践の場で、社会的責任がいかに指導、促進されているかについて検討するため、教師に対して行った半構造化面接のデータに基づき、内容的な分類を試みた。この論文は、インタビューデータという性質を考慮し、質的あるいは実践的研究の成果公開、発表促進を主な目的とした、教育心理学フォーラム・レポート（日本教育心理学会）に発表した。

児童の社会的責任の発達を促進する

—社会的責任の発達を促進する教師の発達援助—  
日本教育心理学会 教育心理学フォーラム・レポート  
FR-2001-001 印刷中

#### （4）シンポジウム等

いくつかの学会のシンポジウムにおいて、社会的責任目標と学業達成過程に関する話題提供を行った。2001年、2002年の発達心理学会ではSocial Motivation（社会的動機づけ）の観点から、また2001年の教育心理学会においては教育実践研究との関わりから、自身の社会的責任目標研究について発表を行った。他領域の研究者の方からの話題や議論は、自分とは違う新しい考えに触れる貴重な機会となった。

Social motivation の発達研究 話題提供  
日本発達心理学会第12回大会 ラウンドテーブル  
p. S74. 2001. 3.

人間関係に基づいた「学びの場」を考える  
—現場教師と研究者の連携を目指して— 話題提供  
日本教育心理学会第43回大会 自主シンポジウム  
p. S102. 2001. 9.

社会性と学業達成の間をつなぐ  
—社会的責任目標が促進する多面的適応—  
動機づけと社会的適応過程 日本発達心理学会第13回大会 会員企画シンポジウム 印刷中 2002. 3.

#### （5）研究助成金

社会的責任目標研究に関して、現在以下の研究助成金を受けている。

平成12・13年度 文部科学省科学研究費補助金（奨励研究A）  
研究課題 児童の社会的動機づけの促進過程

#### 2. その他の研究

##### （1）青年期のネガティブライフイベントからの心理的回復過程に関する研究

中部大学小塩真司、金沢大学長峰伸治、本学大学院後期課程3年の金子一史とともに、レジリエンス（危機的出来事からの心理的回復過程）に関する共同研究を行なっている。ネガティブイベントからの心理的回復は、青年期の精神的健康や動機づけを考える上で非常に重要であると考えられるが、これまでわが国で研究された例はほとんどない。この時期にはひとつの学会発表とひとつの

論文が成果として出された。

レジリエンスを導く精神的回復力  
—尺度構成と信頼性, 妥当性の検討—  
日本心理学会第65回大会発表論文集 p. 940. 2001.  
11. (小塩真司・金子一史・長峰伸治と共著)

ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特  
性  
—精神的回復力尺度の作成— カウンセリング研究  
印刷中 (小塩真司, 金子一史, 長峰伸治と共著)

## (2) 青年期の余暇活動と動機づけに関する研究

青年のレジャー活動と動機づけに関する共同研究を数名の大学院生とともに進めている。本年度はその成果を2つの学会において発表した。日本教育心理学会では、青年期版レジャー活動尺度の作成を行い、日本心理学会では大学生におけるレジャー活動のタイプと意欲低下、アイデンティティ等の関連変数との関係を検討した。これらの研究を基に、これまでの動機づけ研究では注目されていない、本業(学業)以外の活動が動機づけにどのような影響を及ぼすかという問題について焦点を当てていきたいと考えている。

レジャー活動と動機づけ (1)  
—青年期版レジャー活動尺度の構成—  
日本教育心理学会第43回総会発表論文集 p. 113.  
2001. 9. (安藤史高・西口利文・小塩真司・伊田勝  
憲・伊藤敏雄・原田一郎と共著)

レジャー活動と動機づけ (2)  
—レジャー活動と自己意識・意欲低下との関連—  
日本心理学会第65回総会発表論文集 p. 550. 2001.  
11. (安藤史高・西口利文・伊田勝憲・伊藤敏雄・  
原田一郎と共著)

## (3) その他

愛知県立刈谷高等学校教諭の土本恵美(平成11年度本  
学部卒業生)とともに、日本教育心理学会において、い  
じめに関する研究発表を行った。卒業論文をまとめ直す  
ための指導、助言をすることで、卒業生のその後の成長  
に接する機会となり、大学教育に関わるもののやりがい  
を感じる思いだった。

いじめ被害者に対するサポートの有効性  
—教師及び友人によるサポートの有効性認知に関す  
る発達的变化—  
日本教育心理学会第43回総会発表論文集 p. 565.  
2001. 9. (土本恵美と共著)

また、2001年4月より、愛知県犬山市教育委員会学校  
教育客員指導主幹の杉江修治中京大学教授の指導に同行  
し、犬山市の小中学校における少人数授業やチーム・  
ティーチング授業の観察を継続的に行なっている。授業  
観察だけでなく、教員懇談会等への参加なども通じて、  
教育実践を知る貴重な機会となった。今年の観察を踏ま  
え、来年度以降、教室現場における参与観察的方法など  
による実践研究を進めることを計画している。教育心理  
学的研究としての知見とともに、教育実践にも少しでも  
寄与できる計画を立案することが課題である。

# 研究経過報告

増田尚史

2001年4月より助手として心理発達科学専攻に加えさ  
せていただきました。現在、おもに単語の認知過程に関  
する研究を行なっております。以下に、2001年のこれま  
での研究状況をご報告します。

## 1. 査読付き論文

増田尚史・齋藤洋典(2001). 仮名表記語の認知におけ  
る文字錯合: 数字列との比較 基礎心理学研究,  
19, 93-99.

Masuda, H., & Saito, H. (2001). Interactive proc-  
essing of phonological information in reading  
Japanese Kanji character words and their  
phonemic radicals. *Brain and Language* (in  
press).

Saito, H., Yamazaki, O., & Masuda, H. (2001).  
The effect of number of kanji radical compan-  
ions in character activation with a multi-  
radical-display task. *Brain and Language* (in